

2020年度

障害者スポーツ推進プロジェクト(障害者スポーツ用具活用促進事業)

『障害者スポーツチームシンポジウム2020』の開催

事業実施報告書

2021年4月



はじめに

- スポーツは人々の健康維持やQOL(生活の質)の向上に寄与するだけでなく、自己肯定感の獲得や活力のある生活を営む上で重要な要素となっている。
- 他方、障害者のスポーツ参画においては、人的・経済的支援だけでなく、スポーツ環境の整備や用具の利用等様々な条件が満たされる必要がある。
- 本事業では、既存の障害者スポーツチームの活動、運営のノウハウ、課題等を他者と共有することにより、今後、全国各地にこのような“チームの輪”が展開していくきっかけになることを期待し、チーム代表者を招き、Webセミナー形式のシンポジウム『**障害者スポーツチームシンポジウム2020**』を開催することとした。

実施団体：公益社団法人日本義肢装具士協会

国内唯一の義肢装具士の職能団体として1993年に発足し、2017年には公益社団法人として認可され、現在に至る。義肢装具士の資質の向上及び知識・技術の研鑽、及び義肢装具をはじめとした福祉用具の普及・発展を通じた国民の保健・医療・福祉への寄与を目的とする。

- 2017年7月、『パラスポーツ支援ありかた検討ワーキンググループ』を設置し、①パラスポーツ及びパラアスリートへの支援の可能性に関する検討、②関係省庁及び都道府県との意見交換、③2020年東京パラリンピック支援のあり方に関する検討を骨子に活動中。
- 令和元年度「障害者スポーツ推進プロジェクト（障害者スポーツ用具活用促進事業）」では、義肢装具士を対象とした技術講習会『スポーツ義足フォーラム』を全国6会場で開催した。参加者数は86名であった。



スポーツ義足フォーラム



トーゴのパラアスリート支援

障害者スポーツチームシンポジウム2020

2021年1月17日(日)，“障害者スポーツシンポジウム2020”をオンラインで開催した。
シンポジウムの構成はシンポジスト8名による講演からなり、前半は障害者スポーツ全体を捉える包括的な内容とし、後半は、障害者スポーツチームの運営や支援等、実践的な内容とした。

『地域における障害者のスポーツ環境について』

小淵和也氏（笹川スポーツ財団・政策ディレクター）

- 東京オリンピック・パラリンピック2020を契機に社会的関心は高まっているようにみえる反面、パラスポーツに関する国民の理解度やパラリンピアンに対する認知度は決して高くはない
- 各自治体での障害者スポーツに関する取り組みは、行政主催事業としては減少傾向にある
- 障害児・障害者のスポーツレクリエーションの実施頻度は2013年から2017年の間をみてもさほど伸びていない
- 障害の多様化とスポーツ参加レベルの多様化に応じた環境設定や人材支援が求められており、この実現には人的あるいは組織的な連携が不可欠である

『パラスポーツが抱える課題 ～課題があるから変化が生れる～』

上原大祐氏（NPO法人D-SHIP32・理事長）

- 子供達にスポーツを届けること、自分が嫌だと思った事を次世代に残さないよう考え、活動を実践している
- パラスポーツは「障害者のためのスポーツ」と勘違いされているが、「誰もができるスポーツ」である
- 選手の発掘だけでなくスタッフの育成が求められている
- 子供の成長・発達に伴った用具の更新が必要で、保護者の経済的な負担について対応が必要である



ライブ配信
2021年1月17日 ⑩
10:00 - 14:00
オンデマンド配信期間
2021年1月25日 ④ - 2月5日 ⑤
参加無料 (どなたでもご参加いただけます)
登録はオンラインにて
<https://va.apol.on.nra.co.jp/japospo2020/>

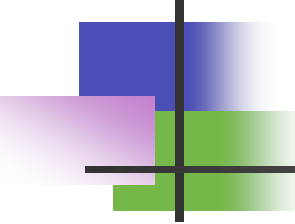
シンポジスト
地域における障害者のスポーツ環境について
小淵 和也
笹川スポーツ財団 政策ディレクター
パラスポーツが抱える課題
～課題があるから変化が生れる～
上原 大祐
NPO法人D-SHIP32 理事長
障害児のチャレンジを支える
～ハビリスジャパンの取り組み～
藤原 清香
一般社団法人ハビリスジャパン 理事
アスリートによる普及活動の意義
田中 詩宗
一般社団法人センターボール 代表理事
スタートライン Tokyo の取り組み
駒場 佳世子
スタートライン Tokyo 理学療法士
東北で活動する義足スポーツサークル
Ambeins (アンベインズ) の取り組み
佐藤 陽介
アンベインズ 代表、理学療法士
参加者の遷移、オスボランニング教室の場合
沖野 敦郎
OSPO 代表、義肢装具士
アンブテックサッカークラブ・FC ALVORADA の
活動と義肢装具士の関わり方
野口 創

運営事務局 株式会社日本旅行 東日本法人支店
〒103-0001 東京都中央区日本橋・伝馬町10-1-1 日本旅行川ビル2階
TEL: 03-6892-5104 FAX: 03-6892-1830 E-mail: japo_2070@kacopp.jp



公益社団法人 日本義肢装具士協会





障害者スポーツチームシンポジウム2020

『障害児のチャレンジを支える ～ハビリスジャパンの取り組み～』

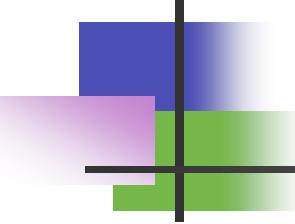
藤原清香氏（一般社団法人ハビリスジャパン・理事，東京大学医学部附属病院リハビリテーション科講師）

- 障害のある子ども達に障害による不参加を受容させるのではなく，様々なことに挑戦し達成することで自己肯定感を育むと共に，身体および精神の健全な成長と発達を支援することが重要
- 補装具の支給対象は日常生活動作の向上に限定されているが，子供の場合，体を使った遊びや運動などもこれに含まれるべきである
- 東京大学医学部附属病院リハビリテーション科の調べによると，3歳以上のすべての患児・家族にスポーツ等活動参加の希望がある
- 実際に多くの児が特例補装具支給やハビリスジャパンからの運動用手先具の無償貸与などで，生活の中でもアクティビティ用義手を活用している

『アスリートによる普及活動の意義』

田中時宗氏（一般社団法人センターポール・代表理事）

- センターポールの趣旨は“パラアスリートの価値化”であり，いずれの活動もパラアスリートの経験を価値として発信する機会につながっている
- 小・中学校でのパラスポーツ体験会は『障害の理解』につながるだけでなく，個々のパラアスリートの取り組みや姿勢を垣間見ることにより，これが生徒を勇気づけ，チャレンジへの後押しになる
- 障害児には，継続してスポーツに取り組める環境づくりが求められており，2020年6月からスタートさせた，肢体不自由児を中心とした練習会“Adaptive sports class”では，センターポールが所有する車椅子を参加者に無料で貸し出し，現役のパラアスリートがコーチとなり，健常児も交えた練習会を行っている
- このような場を通じて，障害児たちが抱く憧れや目標の設定は次世代の育成につながるものであり，これもまさにパラアスリート価値である



障害者スポーツチームシンポジウム2020

『スタートラインTokyoの取り組み』

駒場佳世子氏（スタートラインTokyo・理学療法士）

- 1992年、鉄道弘済会の臼井二美男氏(義肢装具士)が個人として始めた活動に端を発する
- 義足ユーザー（2020年11月現在で未就学児から70歳代の150名以上が登録）、理学療法士(11名)、義肢装具士(5名)、医師(1名)、コーチ(1名)から成る
- チームのモットーは「走ってみたい人なら、誰でも歓迎」、「走る練習を通じて心身共に元気になり、より本人らしい生活を上げていくこと」
- 全体練習会 1回/月（1回の練習会に20～40名が参加）、個人練習会 1/週、競技会への参加、障害者スポーツ啓発イベントへの協力が主な活動である
- 走行用義足は、フィールドテスト用の義足やアスリートからの寄贈などチーム所有の義足を貸出、24時間テレビからの個人への贈呈、パシフィックサプライによるレンタル品、自費での購入
- 参加費無料、傷害保険はチームで負担。スタッフはボランティアで、トレーニング用品、救急道具等はスタッフが負担している

『参加者の遷移 ～オスポランニング教室の場合～』

沖野敦郎氏（OSPO代表、義肢装具士）

- 主に義足ユーザーを対象としたランニング教室であり、2016年12月から2021年1月までに、計46回の開催実績がある
- 総参加人数は延べ474名であり、片義足ユーザーが7割程度。上肢障害・機能障害ユーザーも含む
- 費用は、施設使用料500円、ランニング教室参加費500円、ギソクの図書館使用（板バネレンタル）500円と有料ではあるものの、教室には下腿義足と大腿義足のパラリンピアンが参加して走行指導を行い、また、高価な板バネも安価な値段でレンタルが可能

障害者スポーツチームシンポジウム2020

『東北で活動する義足スポーツサークルAmbeinsの取り組み』

佐藤陽介氏（アンベインズ 代表，理学療法士）

- 東北の義足使用者を集め，年に数回の走行練習会や各種セミナーへの参加，義足についての勉強会などを実施
- 走行練習会には初心者から上級者まで幅広いレベルの切断者が集まる（これまでの参加者は義足使用者11名），年齢層も10代から60代と幅広い
- アスリートを目指すメンバーにはトレーニング指導のほか，二次障害を予防する目的で障害に応じた機能に合わせたフォームの見直し，コンディショニング指導，情報提供等を行なう
- スポーツ用義足パーツはメーカーからレンタルなどを利用。必要な工具やスペアパーツ等については，義肢製作所や義肢メーカーなどからサポートを受けている
- 冬期間は陸上競技場の使用ができない，東北は広域であり移動に問題がある，スタッフの不足等により活動が制限されている現状がある

『アンプティサッカークラブ・FC ALVORADAの活動と義肢装具士の関わり方』

野口 魁氏（アンプティサッカークラブ・FC ALVORADA，義肢装具士）

- 選手としてゴールキーパー(上肢障害者) 5名，フィールドプレーヤー(下肢障害者)13名。スタッフ11名のうち義肢装具士1名，理学療法士 4名
- 主な活動は，練習会（日曜日の午前，月に2～4回）と公式戦への出場，アンプティサッカー関連のイベント参加，チームへの依頼対応など
- 収入はスポンサーからの支援（物品提供を含む）の他，各イベント対応や学校などの教育機関での出張授業に対する謝礼，日本アンプティサッカー協会からの助成など
- アンプティサッカーは砂のグラウンドではクラッチが滑って転びやすいことから，人工芝や天然芝のグラウンドが求められ，関東広域に点在する所属選手がアクセスしやすい練習場探しが課題

参加者

シンポジウムへの参加は、当日のライブ配信の他、日本義肢装具士協会ホームページ上のバナーからオンデマンドで視聴可能とした(2021年1月19日から2月5日までの間)。

参加総数は、当日のライブ配信とオンデマンド配信を合わせて256名であった。



図1 参加者の内訳

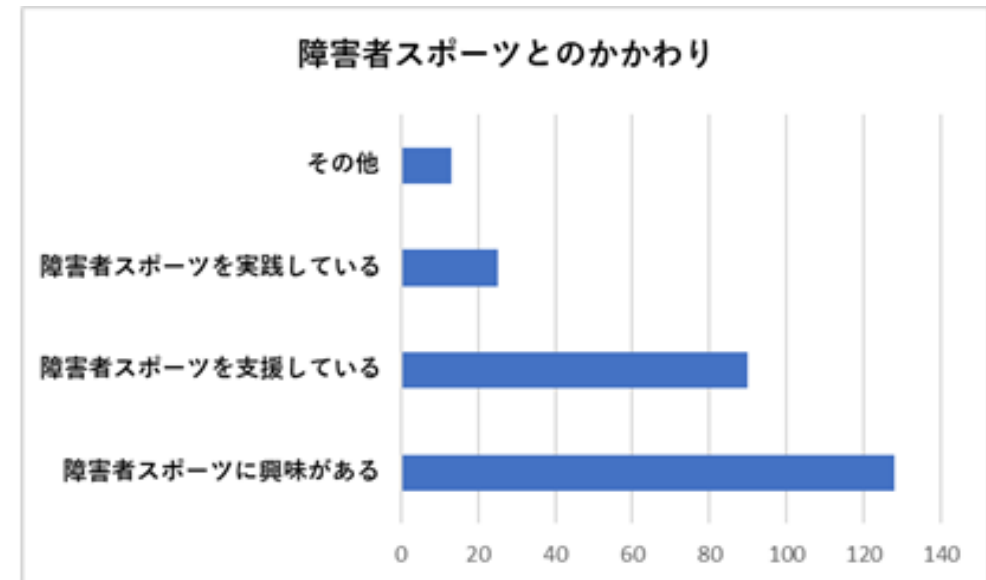


図2 参加者の障害者スポーツとのかかわり

まとめ

- Tokyoパラリンピック2020をきっかけとした障害者スポーツへの関心の高まりがあり、また、障害者スポーツが『パラスポーツ』して一般化されようとする流れがある。一方で、障害のある方々のスポーツ参加に必要な人的・経済的支援、用具の利活用を含めた環境の整備は十分に整っているとは言えない状況にある。
- 本事業では従って、障害者スポーツチームの運営や支援に実際にかかわっておられる方々を招いてシンポジウムを開催し、各チームの運営等に関する知見を集積・共有すると共に、共通した課題の解決についてディスカッションした。
- 参加者数は、当日のライブ配信とオンデマンド配信を合わせて256名であった。
- 本シンポジウムで提起されたいくつかの視点...
 - ・ 障害児のもつ可能性：障害児が遊びや運動を通して学び、自己肯定感を得ることの重要性
 - ・ パラアスリートの価値化：個々のパラアスリートのバックグラウンドや競技への取り組み、努力の姿勢が多くの人たちを勇気づけること、また、これらをより多くの人たちと共有するための仕組みづくりでさえも、障害者スポーツ支援の一部であること
 - ・ 理学療法士/義肢装具士として障害者スポーツにかかわり、チームの活動を支援している“専門職ボランティア”の代表の声：活動の多くがボランティアベースで行われる中、参加者の募集や用具の調達を含めた練習会の運営、競技会への参加などに関する共通の課題の存在
- 本シンポジウムは、チームで支える障害者スポーツの枠組みを考えるうえで大変有意義な機会となった。冊子についても同様に、関係者にとって有用な情報源となることが期待される。



- 著作権者：

スポーツ庁 健康スポーツ課 障害者スポーツ振興室

〒100-8959 東京都千代田区霞が関 3 - 2 - 2

電話：03 - 5253 - 4111（代表）

- 発行元：

公益社団法人日本義肢装具士協会

〒113-0033 東京都文京区本郷5 - 3 2 - 7 義肢会館202

電話：03 - 5842 - 5457